OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中間言語話者の原因・理由を表す表現の切換え : 切換えと表現形式の習得をめぐって
Author(s)	李, 吉鎔
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2004, 6, p. 121-138
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23220
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第6号（2004年3月）121-138

中間言語話者の原因・理由を表す表現の切換え
－切換えと表現形式の習得をめぐって－

李　吉鎔

【キーワード】原因・理由表現、デス形式、マス形式、ノダ形式、学習スタイル、音的類似性

【要旨】

本稿では、韓国語、英語、中国語、タイ語を母語とする日本語学習者の談話におけるノデ・ンデ・カラといった原因・理由を表す表現をとりあげ、スタイル切換えの要因と切換えをささえる表現形式の習得との関わりについて考察を試みた。明らかになった点をまとめると以下のようになる。

(a)中間言語において原因・理由を表す表現ノデ・ンデ・カラの切換えは、その前接形式が丁寧体・普通体の文体的対立を持つため、前接形式の文体的切換えのあり方が大きく影響する。

(b)スタイル切換えは表現形式の習得にささえられているが、表現形式の習得状況は各母語話者間で異なり、同じ習得順序をたどるものではなく、また個々人の学習スタイルにも大きく依存する。

(c)とくに韓国語母語話者の場合、形式の習得には、目標言語（日本語）の既習得形式と母語（韓国語）との音的類似性の両者を活用していることがうかがえる。すなわち、韓国語母語話者は母語との類似性を最大限活用し、なおかつ習得の負担軽減や運用の簡略化を図りつつ、社会言語能力を習得していると言える。

1．はじめに

本稿は、韓国語、英語、中国語、タイ語を母語とする日本語学習者の自然談話におけるノデ・ンデ・カラといった原因・理由を表す表現（接続助詞と接続助詞終了型発話文[1)]）の切換えのメカニズムを明らかにすること、およびスタイル切換えを新形式の習得という文法能力習得との関連で捉え、両者の関わり合いを考察することを目的とするものである。

本誌4・5号には、韓国語、英語、中国語、タイ語を母語とする日本語学習者のスタイル切換えがまとめられ（李2002；橋本2002；樋下2002；永見2003）、習得途上の中間言語におけるスタイル切換えの一面が明らかになりつつある。その中でノデ・ンデ・カラのようにスタイルを軸にして複数形式が存在する原因・理由を表す表現の切換えについては、新形式の習得状況にも言及したものが多い。そこで本稿では、ドメイン間の切換えを中心に取り上げられていた原因・理由を表す表現を、表現形式の習得との関連で、言語内的制約条件を加味して、スタイル切換えとして総合的に捉え直す。具体的には、次の2点について論じることにする。

(1)各母語話者のデータを整理し直した上で、原因・理由を表す表現のドメイン間の切換えを再考し、切換えのメカニズムを明らかにする。(§3.:切換え再考)

(2)切換えにあずかる、あるいはあずからない表現形式について、表現形式の習得および言語内的制約条件を調べ、ドメイン内での表現形式の習得とスタイル切換えとの関わり方を明らかにする。(§4.:切換えをささえる表現形式の習得プロセス)

なお、原因・理由を表す表現を言語変項として取り上げるのは、次の理由による。

(a)原因・理由を表す表現は、中間言語話者の日本語においてスタイル切換えにあずかる言語項目のうち、李(2003a)でまとめた発話文末の丁寧体(デスマス形式)・普通体(非デスマス形式)の切換えとともに文法項目の代表的なものである。自称詞などの語彙項目は個別に習得されることが予想されるのに対して、文法項目は他の文法事象と密接に関係しながら習得されると考えられる。そのため、スタイル切換えおよび文法能力習得の全体像が把握できる項目である。

(b)スタイル切換えに関わる形式が複数である場合、その複数の形式の習得とスタイル切換えの習得は同時進行的である。スタイル切換えを目的に習得する形式はどのような過程を経るのかを明らかにし、スタイル切換えの観点から文法能力習得研究を可能にする。

以下、§2.では本稿で用いる資料について説明し、§3.で原因・理由を表す表現の切換えについてまとめ、§4.で切換えと表現形式の習得との関係について考察を進めていく。

2. 資料

資料は、大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室のSSコーパス・バージョン1.0のうち、韓国語母語話者データ[2)]、英語母語話者データ、中国語母語話者データ、タイ語母語話者データ(以上、中級レベル)と、韓国語母語話者に対する縦断調査による上級レベルのデータ[3)]をあわせて用い、ソウル方言の談話データを必要に応じて参照する。

ここでSSコーパス・バージョン1.0について簡単に説明する。SSコーパス・バージョン1.0は、日本各地の日本語方言話者と中級レベルの日本語中間言語話者のスタイル切換えの実態を把握しようと録音収集したものであり、分析対象者のもつカジュアルスタイルとフォーマルスタイルを引き出すことにその目的がある。日本語方言話者の資料は、親しい友人や家族の場面(カジュアル談話)と、初対面の場面(フォーマル談話)の2つの場面を設定し、老年層と若年層の談話を収録している。日本語中間言語話者の資料は、日本語非母語話者(日本語中・上級学習者)と日本語母語話者(日本人学生)について、それぞれ親しい相手および初対面の相手との談話を収録した。さらにオプションとして、日本語中間言語話者が最も改まると思われる日本人教師場面を設けた。

以下、本稿で用いる記号について簡単にまとめる。〔対NS親〕は親しい日本語母語話者

に対する談話、〔対 NS 疎〕は初対面の日本語母語話者との談話である。インフォーマントの表記はアルファベット 2 文字によって示し、先の記号は世代あるいは母語を表す（Y=若年層（young）、K=韓国語、E=英語、C=中国語、T=タイ語）。後の記号は役割及び場面を表す（A=分析対象者、C=親しい友人（casual 談話）、F=初対面の人（formal 談話））。例えば、KA=韓国語母語話者の分析対象者、EA=英語母語話者の分析対象者、CA=中国語母語話者の分析対象者、TA=タイ語母語話者の分析対象者、JC=日本語を母語とする親しい友人（または〔NS 親〕=Native Speaker 親の関係）、JF=初対面の日本語母語話者（または〔NS 疎〕=Native Speaker 疎の関係）、FC=フランス語を母語とする日本語学習者（または〔NNS 親〕=Non-Native Speaker 疎の関係）のとおりである。なお、以下の本文および表では〔英語：対 NS 親〕のように表記するが、韓国語母語話者データには中級レベルと上級レベルがあるため、両者を〔韓国中級：対 NS 親〕〔韓国上級：対 NS 疎〕のように区別する。

以下、各談話資料のインフォーマント情報と談話資料の詳細な情報を表 1～表 10 に示す。

〔表 1　KA 中級レベル談話[*1] のインフォーマント情報〕

	出身地	母語	年齢[*2]	日本語学習歴 ／ 居住歴	専門	職業（学年）
KA	韓国安養	韓国語	24	本国で9年(週3時間)、来日後1-2ヶ月（大阪）	日本語	専門学校生
NC	ネパール	ネパール語	26	来日後2年	システム工学	学部研究生
BF	ブラジル	ポルトガル語	24	本国で5年、来日後3年	日本語学	学部研究生
JC	兵庫県	日本語	21	0-19：兵庫県　20-21：大阪府	経営学	学部4年生
JF	新潟県	日本語	24	0-17：新潟県　18-22：富山県　23-24：大阪	日本語学	修士2年生
JT	奈良県	日本語	30	0-22：奈良県　23-30：大阪府	日本語学	助手

*1　2001 年 4 月 1 日来日、大阪市所在の日本語専門学校の中級レベル（B-1）に所属している。
*2　NC との対話の収録日が二人の誕生日であったが、年齢は加算していない。KA は NC とアルバイト先で知り合ったのだが、NC の年齢が自分より上であることを強調していた。

〔表 2　KA 中級レベルの談話情報[*1*2]〕

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開
対NNS親	KA－NC	非日本語母語話者（親）	40分	KAが主導している
対NS親	KA－JC	日本語母語話者（親）	40分	JCが質問し、KAが答える
対NNS疎	KA－BF	非日本語母語話者（疎）	40分	同等に話している
対NS疎	KA－JF	日本語母語話者（疎）	40分	JFが質問するが、同等に話している
対NS教師	KA－JT	日本語母語話者（教師）	40分	JTの質問にKAが答え、JTがまとめる

*1　これらの談話のうち 4 談話は 2001 年 5 月に収録したが、〔対 NNS 親〕のみが 7 月の収録となった。KA は、〔対 NNS 親〕の収録前にアルバイトを開始しており（5 月 17 日）、アルバイト先でくだけた話し方および大阪のことばを習っていると報告している。
*2　話しやすい相手の順番：NS 親（JC）＞ NNS 疎（BF）＞ NS 疎（JF）＞ NNS 親（NC）＞ NS 教師（JT）

〔表 3　KA 上級レベル談話[*1] のインフォーマント情報〕

	出身地	母語	年齢	日本語学習歴 ／ 居住歴	専門	職業（学年）
KA	韓国安養	韓国語	25	本国で9年(週3時間)、来日後9ヶ月（大阪）	日本語	専門学校生
JC[*2]	福岡県	日本語	29	0-25：福岡県　26-29：大阪府	-	保育士
JF	京都府	日本語	28	0-15：京都府　16-23：東京都　24-28：大阪	日本語学	博士課程学生

*1　中級レベルの KA と同一人物であり、この時期の日本語専門学校のクラスは上級レベル（A-1）である。
*2　JC は KA より 4 つ年上であるが、当時最も親しい友人として選ばれた。

〔表4　KA上級レベルの談話情報〕

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開
対NS親	KA－JC	日本語母語話者(親)	40分	KAとJCが同等に話している
対NS疎	KA－JF	日本語母語話者(疎)	40分	JFが質問し、KAが答える

〔表5　EA談話のインフォーマント情報〕(橋本2002より転載)

	出身地	母語	年齢	日本語学習歴*1／居住歴	専門	職業(学年)
EA	アメリカ	英語	23-24	国で1年、来日後10ヶ月	スペイン語	学生B4
FC	フランス	仏語	23	国で3年、東京で1ヶ月、来日後10ヶ月	歴史、貿易	修士修了学生
CF	台湾	中国語	27	国で主専攻6年、来日後4ヶ月	日本語	学部研究生
JC	高知県	日本語	21	0-18:高知県　18-21:大阪府	ロシア語	学生B3
JF	兵庫県	日本語	27	0-18:兵庫県　18-27:大阪府	日本語	院生D2
JT	山形県	日本語	42	0-18:山形県　18-24:東京都　24-42:大阪	日本語	助教授

*1　日本語非母語話者の日本語会話のレベルについて、EAはOPIテストで中級の上という判定を2001年6月に受けている。FCはEAとほぼ同じレベル、CFは上級レベルであると考えられる。

〔表6　EAの談話情報〕(橋本2002より転載)

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開*1
対NNS親	EA－FC	非日本語母語話者(親)	39分	EAが多く発話
対NS親	EA－JC	日本語母語話者(親)	43分	二者ほぼ同量の発話
対NNS疎	EA－CF	非日本語母語話者(疎)	40分	二者ほぼ同量の発話
対NS疎	EA－JF	日本語母語話者(疎)	33分	JFが質問、EAが答える
対NS教師	EA－JT	日本語母語話者(教師)	26分	JTが質問、EAが答える

*1〔対NNS親〕では語学の教え方、〔対NNS疎〕ではゲームについてというように、対NNSの場合ではひとつの話題について長く話すことがあるが、対NS場面では話題がめまぐるしく変わった。

〔表7　CA談話のインフォーマント情報〕(樋下2002より転載)

	出身地	母語	年齢	日本語学習歴／居住歴	専門	職業(学年)
CA	中国	中国語	29	日本語学校で2年、大学で2年	商学	修士2年生
SC	スリランカ	シンハラ語	29	日本語学校で2年、大学で2年	経営学	学部4年生
KF	韓国	韓国語	29	日本語学校で2年、大学で2年	観光	学部3年生
JC	大阪府	日本語	24	大阪府(大学の4年間は京都)	運動科学	修士2年生
JF	京都府	日本語	25	0-21:京都府　21-:大阪府	化学	博士2年生

〔表8　CAの談話情報〕(樋下2002より転載)

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開
対NNS親	CA－SC	非日本語母語話者(親)	30分	ほぼ同量の発話
対NS親	CA－JC	日本語母語話者(親)	30分	ほぼ同量の発話
対NNS疎	CA－KF	非日本語母語話者(疎)	35分	KFが主導権
対NS疎	CA－JF	日本語母語話者(疎)	28分	JFが質問、CAが答える

〔表9　TA談話のインフォーマント情報〕(永見2003より転載)

	出身地	母語	年齢	日本語学習歴／居住歴	専門	職業(学年)
TA	タイ	タイ語	20	タイで4年、日本で半年	日本語学	学部3年生
CC	中国	中国語	2?	不明*1	不明	学部3年生
KF	韓国	韓国語	31	韓国で5年学習、日本居住歴7年	日本語学	博士2年生
JC	大阪府	日本語	21	0-21:大阪府	日本語学	学部4年生
JF	新潟県	日本語	24	0-17:新潟県　18-22:富山県　23-24:大阪	日本語学	修士2年生

*1　CCの日本語学習歴に関しては未確認であるが、調査者の判断では上級レベルである。またTAはCCの日本語力について「非常に上手で大阪弁も話せる」と認識していた。

〔表 10　TA の談話情報〕(永見 2003 より転載)

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開
対NNS親	TA－CC	非日本語母語話者(親)	35分	ほぼ同量
対NS親	TA－JC	日本語母語話者(親)	30分	ほぼ同量
対NNS疎	TA－KF	非日本語母語話者(疎)	35分	KFが質問し、TAが答える
対NS疎	TA－JF	日本語母語話者(疎)	30分	JFが質問し、TAが答える

以下、3 節で各中間言語話者の談話における原因・理由を表す表現形式の切換えについて再考し、母語話者ごとの特徴をまとめる。4 節では他の母語話者とは異なり、複雑な様相を呈する韓国語母語話者に絞って、切換えをささえる表現形式の習得に関連する言語内的制約条件や学習スタイルについて見ていくことにする。

3.　原因・理由を表す表現形式の切換え再考

ここでは各中間言語話者の談話データを整理し直し（§3.1.)、各談話における原因・理由を表す表現のドメイン間切換えについて再考する（§3.2.)。そして表現形式の習得との関連で、ドメイン内の母語話者ごとの特徴をまとめる（§3.3.)。

3.1.　データの再集計

本節では、前稿（4・5 号）で取りあげられなかった以下のような観点でデータを整理し直す。そのため前稿の元のデータと用例数が異なる場合もある。

(1)考察の対象を原因・判断や意図の根拠を表す従属節末の接続助詞ノデ・ンデ・カラと、これらの形式が終助詞的に使われた接続助詞終了型発話文に限定する。

(2)前接形式を丁寧体と普通体に分けて分類し直す。

(3)ただし、次のような例は考察から省いた。

(3-1)接続助詞か接続詞か判断が困難な例（例〔1〕)。(KA1 例、EA2 例)

(3-2)前接形式の分類が困難な例（例〔2〕)。(KA3 例、TA2 例)

〔1〕

150EA:(前略)　で、その中で　日本語が　入って　いました。で、それ　見て、ん、もう、すごい、すごく、

→　　わからないだから　すごく　興味が　ありました。(後略)　　〔英語:対 NS 教師〕

〔2〕

272TA:そんなことまで

273JC:あー

→274TA:してるんから　だから　なんかえーっとこの映画　　〔タイ語:対 NS 親〕

なお、ノデ・ンデ・カラが互いに対立しない「～だろうカラ／～カラです／～のは～カラだ」の構文は用いられていないことを報告しておく。

3.2. 結果および解釈

§3.1.1.のデータの整理の手順に従って、再集計した結果を示す。表11～表14は各中間言語話者の中級レベル（表11では上級レベルを含む）における原因・理由を表す表現をドメイン間でまとめたものである。

〔表11　KAの原因・理由を表す表現〕

	中級レベル					上級レベル	
	対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎	対NS教師	対NS親	対NS疎
丁寧体+ノデ	3 (1/2)*1	-	1 (0/1)	1 (0/1)	3 (2/1)	-	8 (4/4)
+ンデ	2 (0/2)	-	-	-	-	-	1 (1/0)
+カラ	1 (0/1)	-	9 (5/4)	3 (2/1)	4 (1/3)	-	-
普通体+ノデ	2 (2/0)	11 (8/3)	14 (7/7)	15 (9/6)	13 (9/4)	-	5 (2/3)
+ンデ	14 (10/4)	-	-	-	-	10 (4/6)	36 (18/18)
+カラ	26 (20/6)	68 (40/28)	17 (11/6)	23 (16/7)	43 (30/13)	56 (20/36)	19 (12/7)

*1 (1/2)という数字は、(従属節末の接続助詞／接続助詞終了型発話文)の数を表す(以下、表14まで同様)。

〔表12　EAの原因・理由を表す表現〕

	対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎	対NS教師
丁寧体+カラ	-	-	20 (13/7)	49 (34/15)	22 (15/7)
普通体*1+カラ	14 (12/2)	12 (10/2)	-	-	-

*1 橋本(2002)は「非丁寧体」という用語を用いているが、本稿では「普通体」と統一する。

〔表13　CAの原因・理由を表す表現〕

	対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎
丁寧体*1+カラ	-	2 (2/0)	6 (2/4)	2 (0/2)
普通体*1+カラ	10 (4/6)	5 (3/2)	14 (7/7)	4 (2/2)

*1 樋下(2002)では「丁寧」、「非丁寧」となっているが、本稿では「丁寧体」「普通体」と統一する。

〔表14　TAの原因・理由を表す表現〕

	対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎
普通体+ンデ	-	-	4 (1/3)	9 (3/6)
普通体+カラ	7 (6/1)	7 (4/3)	3 (2/1)	2 (1/1)

以上の表11～表14から、ドメイン間切換えに関して、次のようなことがわかる。

(1)KAの表11を見ると、中級レベルではすべての場面でノデ、カラが用いられているが量的にカラが多い。フォーマルな場面および話し相手が年上の〔対NNS親〕で丁寧体に後続するノデ、カラが現れる。日本語の話しことばに慣れ始めた〔対NNS親〕では、ンデが現れ始めている（〔対NNS親〕場面の特徴については、§2.〔表

1〕*2、〔表 2〕*1 を参照されたい)。

(2)KA は、上級レベルになると、ノデの多くは丁寧体に、カラは普通体に接続するといった両極化する傾向が見られる(普通体+ノデは少なく、丁寧体+カラは皆無である)。ンデについては、中級レベルで習得の進んだ〔対 NNS 親〕の場面と同じように、その多くは普通体に接続するが、丁寧体に接続する例もある。

(3)表 12 の EA の場合は、すべての場面でカラのみ出現している。カジュアルな場面ではカラの前接形式が普通体であり、フォーマルな場面では丁寧体である。

(4)表 13 の CA の場合、EA と同様、すべての場面でカラのみ出現している。対疎場面と〔対 NS 親〕では丁寧体+カラが用いられるが、普通体に接続したカラの使用数が多い。しかも、最もカジュアルな〔対 NNS 親〕では普通体カラのみである。

(5)表 14 の TA の場合、すべての場面でカラを用いるが、対疎場面ではンデも用いている。ンデ・カラともに普通体にのみ接続する。

以上の結果から、それぞれ次のようなドメイン間切換えのありようが見受けられる。

(a)(1)の結果から、KA は中級レベル段階では、原因・理由を表す表現形式よりも、主に前接形式の丁寧体・普通体を使い分けることで切換えを行っている。

(b)(2)の結果から、上級レベルの KA はノデをフォーマルな形式、カラをカジュアルな形式として捉え、ノデとカラをスタイル差のある形式として意識しているようである。フォーマルなノデとカジュアルなカラを前接形式の丁寧体・普通体といった文体と共起させることで、スタイルの差を明確に示し、切換えている。

(c)(3)の結果から EA については、当該表現形式の使い分けはないが、前接形式の丁寧体、普通体といった文体が切換えの対象となっている。

(d)(4)から CA においては当該表現形式の使い分けはないが、前接形式の丁寧体・普通体が切換えの対象であると考えられる。

(e)(5)から、TA はンデをカラよりフォーマルな形式と捉えており、当該表現形式を使い分けることでスタイル切換えを行っている。しかし、他の母語話者とは異なり、前接形式の丁寧体・普通体といった文体は切換えにあずからない。

以上、ドメイン間切換えに注目すると、それぞれの中間言語話者は、複数の原因・理由を表す表現形式(KA、TA)と前接形式の文体差(KA、EA、CA)によって、ドメイン間で切換えていることがわかった。しかし、ドメイン間切換えの様態は母語話者ごとにそれぞれ異なっている。そこで、次節ではドメイン内の前接形式の丁寧体・普通体の使用状況と原因・理由を表す表現形式の使い分けについて、表現形式の習得との関連で、母語話者ごとにまとめることにする。

3.3. 母語話者ごとの特徴

本節ではドメイン内の前接形式と当該表現形式について、母語話者ごとにまとめるが、他の母語話者とは異なり、当該表現形式と前接形式の両者を切換えの対象としている韓国語母語話者については、節を改めて切換えをささえる表現形式の習得過程やそれに関連する言語内的制約条件、学習スタイルについて論じたいと思う（§4.)。

3.3.1. 英語母語話者の場合

まず、英語母語話者の場合であるが、EA は前接形式の丁寧体・普通体といった文体差を基準にスタイルを切換えており、ノデ・ンデは用いていない。そこでドメイン内の切換えについて調べた結果、以下の 2 点の特徴が明らかになった。

(1)EA の用いる丁寧体に注目すると、デス形式に比べて複雑な処理を要するマス形式が安定的に使われることがわかった。例えば、かなり複雑な手続きを要する過去丁寧形についても、〔対 NS 教師〕30 例、〔対 NS 疎〕35 例、〔対 NNS 疎〕43 例を使用している（その他の場面では丁寧体が用いられない)。さらに、EA が意図的にマス形式の過去丁寧形を使用しようとすることは、例〔3〕のような言い換えからも確認することができる。丁寧形式を使わなければならないという過剰意識が働き、連体修飾節で丁寧体を用いることもある（例〔4〕)。これらのことから、EA については前接形式の丁寧体の生成に注意が向けられ [4]、ノデという新しい形式の習得は進んでいないと考えられる。

〔3〕

→158EA:実は ここに はじめて 来たときは 日本語 あまり 話せな、ませんでした。(後略)

〔英語:対 NS 疎〕

〔4〕

→030EA:えっとね、アメリカの 場合は ちょっと、そんなに 決めて いませんが、とr、とらなければ、あ、行け

→ ません 授業が いっぱいですから、えっと、んー、ふっつー[普通]の 学生は (JF:ええ) 4 年間で 卒業できません。

〔英語:対 NS 疎〕

(2)(1)とも関連するが、EA は敬語形式などの正確な形態処理を行い、適格な文を産出する文法能力の習得を重視するタイプの学習者であると考えられる。このことは例〔5〕（次ページ）の談話資料からもうかがえる。例〔5〕は〔対 NS 教師〕談話であるが、敬語などの言語形式を（自由に）使えるようにならないといけないという学習に関するコメントが見られる。EA は、デス形式はもちろんのこと、マス形式も多く、かつ正しく使っているにもかかわらず、このように述べている。202EA からは、EA の注意が敬語形式の産出にあり、このことは EA が文法能力の習得を優先する学習スタイ

ルを持っていることがわかる。このことも、(1)の解釈同様、EA の注意が前接形式の丁寧体の生成に向けられていることを傍証するものである。

〔5〕

199JT:え、まだ、ね、あと 1年ぐらい ある わけですから、ますます うまくなると 思いますし、

〈中略〉

202EA:んー、そうだと いいです。そうだと いい。でも、ほんとに 練習しなければなりません。すみません。

→ わたしの 敬語は 尊敬語は あんまり できません。ちょっと 学んだ ことが あります(JT:うん)が、あまり 使いませんから、ちょっと、先生が、あの、尊敬語を 使った ときは、その 場合は わかりましたが、あんまり 自分で 使えませんから すみません。 〔英語:対 NS 教師〕

3.3.2. 中国語母語話者の場合

中国語母語話者の場合は、表現形式はカラのみが用いられており、切換えは前接形式の丁寧体・普通体といった文体によるものであった。ただし、§3.1.表 13 では〔対 NS 親〕でも丁寧体に接続するカラが出現しており、表 12 の EA の結果とは異なる様子が見られた。そこで丁寧体・普通体といった文体について、CA の全談話における丁寧体の諸相を調べると、表 15 のようになる。表 15 で注目すべきことは、CA は〔対 NNS 親〕〔対 NS 親〕においても丁寧体を多く用いるということである。

〔表 15 中国語母語話者の丁寧体〕

	対 NNS 親	対 NS 親	対 NNS 疎	対 NS 疎
丁寧形式を含む全発話数[*1]	27	44	57	54
マス形式	10	12	16	9
デス形式	17 (3/12)[*2]	32 (2/26)	41 (10/26)	45 (8/35)

*1 発話文末、従属節末を集計。
*2 (3/12)という数字は、(イ形容詞類／名詞・ナ形容詞現在)の数を表す。

このことについて、次の 2 つの解釈が可能である。

(1)まず 1 つは CA の用いる丁寧体が単に丁寧さや話し相手・場面に対する待遇を示すものではないということである。そのため対親場面でも丁寧体が出現すると解釈することができる。しかし、デス形式とともに、形態的処理の複雑なマス形式も多く用いられていること、スタイル切換えに際して丁寧体が最も認識されやすいこと(李 2003a)を考えあわせると、樋下(2002)の指摘通り丁寧体は丁寧度の高い形式として認識されていると考えられる。

(2)もう 1 つの可能性として、日本語学習者にとって親しい相手といっても母語話者場面のように普通体のみを用いる間柄ではないということが考えられる。例〔6〕〔7〕は対親場面の会話であるが、話し相手も丁寧体を用いており、この可能性を裏付けるものである。

〔6〕

→009SC:(前略)だから まだまだいっぱいあると思うんですねー えーCAさんは日本に来て何年ぐらいですか

010CA:ぼくもう8年目です

→011SC:8年目ですか(うん)けっこう長いですねー 〔中国語:対NNS親〕

〔7〕

→009JC:送別会行きます↑

010CA:行きたいけど ちょっと 学校(あー)学校も ありますから 2年生の 送別会 〔中国語:対NS親〕

以上で見てきたように、CAは丁寧体を丁寧さや話し相手・場面に対する待遇を示すために用いているが、対親場面でも丁寧体が用いられるのは、日本語学習者にとって親しい関係で使用するスタイルが母語話者のそれとは異なるためであると考えられる。カジュアルな談話の収録を目指した調査意図に反するこのような事態は韓国語母語話者の談話収録においても起こっており、日本語学習者(外国人)という立場の特殊性から、「親しい関係」ということが日本語母語話者とは異なるということを十分考慮すべきであろう。

3.3.3. タイ語母語話者の場合

タイ語母語話者の談話で、対疎場面でンデが出現すること、ノデは使用されないことについて、ドメイン内でのカラ・ンデの使い方を調べた結果、次の2点が明らかになった。

(1)対疎場面で用いられたンデは、原因・理由を表す表現としてカラと対立するものではなく、むしろ終助詞的に発話文を終わらせるものと考えられる。まず、§3.1.表14の対疎場面で使われるンデは接続助詞として用いられたものよりも接続助詞終了型発話文が多い(〔対NNS疎〕4例中3例、〔対NS疎〕9例中6例)。そしてンデを使うとすぐに接続詞(例〔8〕〔9〕の波線部)を用いて発話を補っている。

〔8〕

⇒733TA:だから 今まではー 2回ホームステイ行って来たんでー で 1回目は島根

734KF:あー

735TA:県 〔タイ語:対NNS疎〕

〔9〕

461TA: 日本人は寒くないと 寒くないぐらいと

462JF:うんうんうん

→463TA:思うんでー

464JF:うん

⇒465TA:だけどー　なんてゆうか　えー　その 11 月とか 12 月の時とか　あ　1 月とかもー

466JF:はい

467TA:そうゆう時期だったら

468JF:うん

→469TA:まーかなり　なんてゆうか　寒くなってきたんで

470JF:うん

⇒471TA:だけど　バンコックだったら　そんなに寒くなって来ないんで

472JF:うんうんうん　〔タイ語:対 NS 球〕

(2)TA がンデを使用するが、ノデは使用しないことについては、目標言語のインプットの環境によるものと考えられる。TA は 2000 年 10 月に来日し、滞日約 8 ヶ月目に談話収録が行われている [5]。この時期が自然習得による TA の話しことばの運用能力が急激に伸びる時期であることは想像に難くない。TA が学校における学習よりも日常生活における習得を充実させていたという談話収録者の指摘もあり、TA が教室場面で学習するフォーマルなノデは習得することなく、ンデを習得することも十分あり得ると考えられる。このような背景のもとに、(KA の場合はノデからンデが派生されるのに対して (§4.2.1.参照)) TA の場合はノデを習得せず直接ンデを習得したと考えられる。

以上で EA、CA、TA のドメイン内における前接形式と当該表現形式の使い分けの特徴についてまとめた。ここで最も注目されるのは、前接形式と当該表現形式の使い分けの様相は中間言語話者ごとに異なり、これらは学習スタイル (EA) や日本語学習者という立場の特殊性 (CA)、目標言語のインプットの環境 (TA) などによるということである。

次節では、ここで取り上げられなかった韓国語母語話者の特徴について、詳しく論じたいと思う。

4. 切換えをささえる表現形式の習得プロセス

本節では他の母語話者とは異なり、当該表現形式と前接形式の両方を切換え、複雑な様相を呈する韓国語母語話者に絞って、§3.2.のドメイン間切換えの結果からは明らかにされなかった次の 2 点を手がかりにドメイン内の切換えについて考察する。

(1)KA の場合、丁寧体+ノデ、普通体+カラというふうにスタイルの差を明示しているが、中級レベル・上級レベルともに普通体+ノデの使用が見られる (表 11 参照) のはなぜか。

(2)ンデをフォーマルなノデの母音脱落によって生成されたものと考えると、フォーマ

ルなノデに近いと考えられ、丁寧体と共起することが期待されるわけであるが、上級レベルでも主に普通体と共起するのはなぜか。

この2点を明らかにすることを目的に、次の順序で考察を進める。

(a)カラ・ノデ・ンデがどのような前接形式とともに用いられるか。その言語内的制約条件について調べる（§4.1.）

(b)(a)の結果をもとに、スタイル切換えを目的に習得される表現形式（ここではノデ・ンデ）の習得過程について考察する（§4.2.）

(c)表現形式の習得を左右するKAの学習スタイルについて論じる（§4.3.）

ここでとくに(b)の習得過程を取り上げるのは、スタイル切換えに関わる形式が複数である場合、その複数の形式の習得とスタイル切換えの習得は同時進行的であり、スタイル切換えは表現形式の習得にささえられているためである。

4.1. 内的制約条件

韓国語母語話者の談話で、原因・理由を表す表現形式がどのような環境でどの形式が用いられやすいかを、前接形式を中心にして分類すると、表16のようになる。表16の前接形式の分類において、ナイ／イナイ／～タコトガナイ／～ナケレバナラナイを形容詞と分類した。なお、表16の結果は、接続助詞と接続助詞終了型発話文をまとめたものである。

〔表16　韓国語母語話者の原因・理由表現の言語的制約条件〕

レベル	中級レベル												上級レベル					
ドメイン	対NNS親			対NS親			対NNS疎			対NS疎			対NS教師			対NS親			対NS疎		
前接形式 ＼ 言語変項	カラ	ノデ	ンデ	カラ	ノデ	ンデ	カラ	ノデ	ンデ	カラ	ノデ	ンデ	カラ	ノデ	ンデ	カラ	ノデ	ンデ	カラ	ノデ	ンデ
マス類[*1]	-	-	1	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-
(ん)デス類[*2]	1(1)	3(1)	1(1)	-	-	-	9(7)	-	-	2(2)	-	-	4(3)	-	-	-	-	-	-	8	1
名詞／ナ形容詞語幹[na]	-	-	6	-	1	-	-	1	-	-	5	-	-	5	-	-	-	-	-	2	3
過去形[ta]	-	2	6	2	10	-	-	10	-	-	9	-	-	8	-	3	-	10	-	1	16
動詞類[*3] [u (ru)]	13	-	1	21	-	-	9	2	-	10	-	-	23	-	-	19	-	-	7	1	15
形容詞類[*4] [i]	11	-	1	24	-	-	7	1	-	10	1	-	18	-	-	22	-	-	3	3	2
名詞／ナ形容詞[da][*5]	2	-	-	21(8)	-	-	1	-	-	3(3)	-	-	2(1)	-	-	10(2)	-	-	9(1)	-	-

*1 マス類にはマシタノデ1例〔対NNS疎〕、マセンカラ1例〔対NS疎〕、マセンノデ1例〔対NS疎〕が含まれる。
*2 デス類にデシタは出現していない。なお、( )内は、ンデス形式の用例数(内数)である。
*3 動詞類は、動詞、テ補助動詞、可能動詞、存在動詞、動詞の可能形、できる、の現在形である。
*4 形容詞類には、形容詞、タイ(願望)、否定形が含まれ、すべて現在形である。
*5 ( )内は、ノダ形式の用例数(内数)である。

表16のなかで、前接形式「ナ」(名詞述語の連体形、ナ形容詞連体形）はノデとのみ、前接形式「ダ」(名詞、ナ形容詞）はカラとのみ接続し、それ以外の形式と接続しない固定的なものである。すなわち、これらはノデ・カラが対立しない環境にあるため「ダカラ」、「ナノデ」を除いて考えると、次の2点が指摘できる。

(a)過去形［ta］にノデ・ンデが接続することが多い。

(b)過去形［ta］以外の動詞類、形容詞類の現在形にはカラが接続することが多い。しかし、上級レベルになると動詞類がンデと接続することが増えるが、カラは依然として形容詞類との結びつきが強い。

以下、上の2点に注目し、スタイル切換えを目的に習得されるノデ・ンデの習得過程について考察を進める。

4.2. 習得過程

4.2.1. 目標言語の既習得形式（ノダ形式）の活用

まず、KAのノデ・ンデの使用が過去形[ta]に後続する場合に多いことの理由を考える。庵他（2000）によると、主要初級教科書において原因・理由を表す表現形式はカラが先に提示され、ノデはカラより後の学習項目である。ここでKAがカラを先に習得し、後にノデ・ンデを習得したと仮定すれば、KAは過去形［ta］を一つの基準にしてノデ・ンデを習得したと考えられる。

結論から言えば、KAは目標言語（日本語）の既習得形式のノ(ン)ダ形式を活用して、ノデ・ンデを習得したと考えられる（ただし、KAの使用するノダ形式が意味・用法的に適切かどうかは不問[6]）。そして、ノダ形式からノデ・ンデを派生させて産出するため、これらの形式が重複することになる。その結果、スタイル差を出すためにノデを習得していたにもかかわらず、ノデ・ンデは丁寧体と共起しにくくなったと考えられる。

また、逆接の接続助詞ケド、ケレドモは中級レベルの〔対NS親〕〔対NS疎〕では89.7%（61／68例）、上級レベルで77.4%（72／93例）がノダ（ノデス）形式を介するが、原因・理由の表現についてはノダ形式の用例数が少ない（ノダ形式の用例数に関しては表16の*2*5を参照）ことも、ノダ形式とノデ・ンデが重複していることの証拠になろう（李2003b）。

ここで参考までにKAがノダ形式(ンデス形式)を如何に多く用いるのかを知るために、KAの談話に用いられた丁寧体をノダ形式に焦点をあててまとめると、表17のようになる。

〔表17　韓国語母語話者の丁寧体とノダ形式〕

	中級レベル					上級レベル	
	対NNS親	対NS親	対NNS疎	対NS疎	対NS教師	対NS親	対NS疎
丁寧形式を含む全発話数[*1]	193	26	217	181	242	-	250
マス形式[*2]	16	3	35	26	38	-	22
マス+過去形(内数)	5	-	7	2	-	-	2
デス形式[*3]	45	8	37	45	43	-	58
ンデス形式[*3]	132	15	145	110	161	-	170
過去形+ンデス(内数)	40	5	42	32	35	-	41

*1 発話文末、従属節末を集計。
*2 マス形式の中には、ハジメマシテ、～ト申シマスなどの定型表現、また否定形マセンが含まれる。
*3 デス形式、ンデス形式には、デショ、ンデショも含まれる。デショ形式・ンデショ形式は最大5例以下である。

表17からはマス形式に比べてデス形式・ンデス形式が多く、さらにマス+過去形に比べると過去形+ンデスが圧倒的に多用されることがわかる。過去形+ンデスは必ずしも形容詞類、名詞/ナ形容詞に多いわけでもない（例〔10〕では動詞）。

〔10〕

→586KA:まあ 勉強しようと思って 一生懸命したのは きゅじゅ《九十》六年から 始め 始まったんですよ。

〔韓国中級:対NS疎〕

なお、筆者の経験によっても、韓国語母語話者の日本語にはノダ形式が多用されていると思われるが、それには、以下の3点の要因が考えられる（李2003b）。

i マス形式がデス形式に比べて形態的に複雑な処理を要する点（渋谷1997）
ii イ形容詞のみ「過去形＋丁寧形」であり、他の用言は「丁寧形＋過去形」であるといった目標言語（日本語）の不合理な体系（野田2001）[7)]
iii 用言の活用がすべて「過去形＋丁寧形」である母語（韓国語）の潜在的な影響

このような要因により、KAは普通体にノダ形式（ノデス形式）をつけることで（例えば、イッタンデス）、少ない努力で効率よく丁寧体を生成していると言える。この形は、イッタ人、イッタラのように連体修飾句、従属節などにおいても使われる形式である。そのため用言の活用体系を「普通体+α」として統一的に捉えることができる。これには、第2言語習得における負担を軽減し、運用を簡略化するといったストラテジーが用いられているのである。

しかし、表17のンデス形式には、例〔11〕のように非過去形+ンデスという例も多い。過去形+ノデ・ンデに比べて、非過去形+ノデ・ンデの使用はきわめて少なく、表16に見るようにその使用は上級に限られる。過去形+ノデ・ンデに比べ、非過去形+ノデ・ンデの使用が遅れるのはなぜかについては今後の課題としたい。

〔11〕

134KA:あの 日本について カイが《関心が》 たくさん ヒル 人じゃなかったら、(JT:うん) 別に 知らな
→ いんですよ。(JT:うーん) 日の丸は{唾を飲み込む} たいてい 歴史の 本とか 見れば、(JT:うん
→ うん) 出るんですよね。 〔韓国中級:対NS疎〕

4.2.2. 母語との音的類似性の活用

次に、KAは過去形［ta］以外の動詞類、形容詞類の現在形にカラを用いることが多いことについて考察する。上級レベルになると動詞類がンデと接続するが、カラは依然として

形容詞類と結びつきが強い。ここには母語（韓国語）の影響が根底にあると考えられる。KA の母語であるソウル方言談話資料の例〔12〕では、246KA のように韓国語の原因・理由を表す表現-니까（[nik'a]）が用いられている。

〔12〕

→246KA:근데 거의 실력이 (YF:그렇죠.) 좌우를 하니까, 그리구 뭐….

（日本語訳:しかし、実力がほとんど左右するから、また…。）　〔ソウル方言:対 NS 疎〕

韓国語の原因・理由を表す表現形式-니까（[-nikk'a]）は、日本語の形容詞類現在に後接したカラの[-ikara]と音的に類似している。このような母語（韓国語）の形式-니까[-nikk'a]との音的類似性をもつ目標言語（日本語）の形容詞類（形容詞現在、否定形、タイ（願望））の前接母音［i］にカラ（ikara）が接続しやすくなると考えられ、音的類似性を持たない動詞類は（上級レベルで）ンデと容易に接続するようになると考えられる。

4.3. KA の学習スタイル

以上、KA が原因・理由を表す表現形式を習得する際の言語内的制約条件（§4.1.）と習得過程（§4.2.）について述べてきた。§4.1.で述べたように KA は過去形［ta］にノダ（ノデス）形式を活用して効率よく丁寧体を生成し、ノデ・ンデを産出しているが、一方でノダ（ノデス）形式の汎用も見られる。これは KA が適格な文を産出し、正確な形態処理を行うという文法能力にはこだわらず、コミュニケーション能力を優先する学習スタイルを持っていることとも関係すると考えられる。このことは、例〔13〕のような学習スタイルに関する談話資料からもうかがえる。

〔13〕

→606KA:わだし[私]の 場合は 座って 勉強 ちょっと しないんですよね。

607JF://あ も 話す…。

→608KA://あ 人と 会って 話す ごと[こと]が 好きだったので、(JF:ああー) まあ これが ほしいだと 思ったんですよね。

→609KA:人を[に] 会って、(JF:うんうん) 話したいのー あの 気持ちが 多かったんですよね。

＜中略＞

730KA:日本語 勉強する どきに 難しい ごと?

731JF:うん なんか こう いろいろ 文法っていうか

→732KA:まあ 文法的は[文法的には] 似てるから まあ そんなには 難しくないと 思うんですが、(JF:あえ うん) 作文が 難しい。　〔韓国中級:対 NS 疎〕

例〔13〕の 732KA で日本語は韓国語と文法的に似ているから難しくないとし、606KA では机に向かってする勉強はしない、すなわち適格な文や結束性のある文章を作り出し理解する文法能力の勉強はしないと報告している。そして 608KA、609KA のコミュニケーションをしたい願望があるということから、KA はコミュニケーション能力を重視する学習（習得）を行っており、そのため複雑な処理を要する項目の習得回避など、習得の負担軽減や運用の簡略化を図りつつ学習（習得）していると考えられる。

5. 終わりに

以上本稿では、日本語学習者の談話におけるノデ・ンデ・カラといった原因・理由を表す表現（接続助詞と接続助詞終了型発話文）を取り上げ、まずドメイン間切換えについてまとめた。次にスタイル切換えに関わる形式が複数である場合、その複数の形式の習得とスタイル切換えの習得は同時進行的であり、スタイル切換えは表現形式の習得にささえられていることから、ドメイン内切換えと習得過程について分析を行ってきた。その結果、明らかになった点は、次の 4 つにまとめられる。

(a)ノデ・ンデ・カラの前接形式が丁寧体・普通体といった文体的対立を持つため、ノデ・ンデ・カラの切換えには前接形式の文体的切換えが大きく影響する（§3.2.)。前接形式の文体的切換えは、韓国語母語話者、英語母語話者、中国語母語話者に見られるが、タイ語母語話者には見られない。

(b)切換えをささえる新形式の習得の有無および習得の仕方は、少なくとも韓国語母語話者（KA）と英語母語話者（EA）の場合は学習スタイルに大きく依存するものである（§3.3.1.；§4.3.)。(c)とも関連するが、韓国語母語話者（KA）はコミュニケーション能力重視型で、形態的に処理の簡単なデス形式を主に用い、またノデ、ンデも習得している。しかし英語母語話者（EA）は文法能力重視型で、形態的な処理が難しいマス形式などの敬語形式の産出に専念するあまり、ノデ・ンデといった新形式は習得していないと考えられる。

(c)表現形式の習得状況は中間言語話者ごとに異なり、中間言語話者が同じ習得順序をたどるものではない。これらは学習スタイル（KA、EA）や日本語学習者という立場の特殊性（CA)、目標言語のインプットの環境（TA）など、さまざまな理由による（§3.3.；§4.2.)。新しい形式を習得する場合、韓国語母語話者はノデ、ンデを習得しているが、タイ語母語話者はンデのみ習得している。なお、これらの形式の習得は現在進行中であるため、その使用は不安定なものである。

(d)切換えに関わる形式の習得には、目標言語の既習得形式や母語（とくに韓国語母語話者において韓国語）の規則が影響していることも指摘できる（§4.2.)。つまり、韓国語母語話者は母語との（音的）類似性を最大限活用し、なおかつ習得の負担軽減や運用の簡略化を図りつつ、スタイル切換えという社会言語能力を習得していると言える。

【注】

1) 李（2003a）は、自然談話の話しことばに多く見られる、述語で終わらない発話文について、話し手の発話意図や話者交替ルールおよび形態的特徴から、体言終了型・用言終了型・接続助詞終了型・中途終了型の 4 種類の発話文に区別した。接続助詞終了型発話文とは、接続助詞が逆接や因果関係など本来の機能を失い、終助詞的に使われ、発話文末として認められるものを指す。

2) 韓国語母語話者中級レベルのスタイル切換えをまとめた李（2002）では、70 分の収録談話を用いているが、本稿では他母語話者の談話および上級レベルの談話収録時間とあわせ、談話の冒頭から 40 分間のみを用いる。

3) 韓国語母語話者の縦断調査による上級レベル談話では〔対 NS 親〕・〔対 NS 疎〕のみを収録している。

4) 橋本（2002）は、EA は丁寧形式（本稿でいう丁寧体）を規定どおりに使おうとしており、フォーマルな場ではできるだけ丁寧体を用いるべきだと意識しているようであるとも述べている。

5) タイ語母語話者の談話収録について、〔対 NNS 親〕〔対 NS 親〕の収録が 2001 年 4 月 23 日、〔対 NS 疎〕は 2001 年 5 月 30 日、〔対 NNS 疎〕の収録は 2001 年 7 月 28 日である。対親談話の収録より対疎談話の収録が遅れており、この間にンデを自然習得したことも考えられる。

6) KA のノダ（ノデス）形式の多用は、文法形式ノダの意味・用法を無視し、スタイル的意味を与えることを目的としたものも多く、社会言語能力が文法能力を左右する例も見られる（例〔14〕）が、詳細については稿を改めたいと思う。

〔14〕（知らない単語を教えてもらう）

→354KA:まあ　車ーは　そんなに　降っても　まあ　これ、なん　何て　言ったんでしょう?　雪が　たくさん　降って　ビニルハウスとか　なく。　（「言いましたっけ？、言うんでしょう？」の意）

355JF:うんうん　ま　つぶれない。　〔韓国中級:対 NS 疎〕

7) KA は野田（2001）の指摘するような、動詞、名詞述語、ナ形容詞の丁寧過去形として「書いたです／雨だったです／静かだったです」は全く用いていない。おそらく KA はこのような形は標準的な日本語として不自然と考えており、形式的には正しいと認められるノダ形式を用いていると考えられる。

【参考文献】

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

李　吉鎔（2002）「韓国語母語話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』第4号　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

_____（2003a）「フォーマルな談話での非デスマス形式の切換えー日本語母語話者と中間言語話者の比較ー」『阪大社会言語学研究ノート』第5号　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

_____（2003b）「スタイルシフトの習得プロセスについての社会言語学的研究ー原因・理由と逆接の接続詞・接続助詞を中心にー」『第 14 回第二言語習得研究会予稿集』横浜国立大学

渋谷勝己（1997）「日本語学習者のスタイル切り替えー従属節の丁寧表現をめぐってー」『無差』第4号　京都外国語大学日本語学科

永見昌紀（2003）「タイ母語話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』第 5 号　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

野田尚史（2001）「学習者独自の文法の背景」野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子著『日本語学習者の文法習得』大修館書店

橋本貴子（2002）「英語母語話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』第 4 号　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

樋下　綾（2002）「中国語母語話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』第4号　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

い　きりょん（大阪大学大学院生）

ih_kilyong@anet.ne.jp